ISSN 0919-4657

KONC

関西自然保護機構会報

Bulletin of Kansai Organization for Nature Conservation

17巻1号（通算29号）



1995年7月
関西自然保護機構

表紙の言葉

河野　昭一

カタクリー春をつげる使者

カタクリ（古名　堅香子）（*Erthronium japonicum* Decne.）は，北東アジア，北はサハリン，南千島，北海道，本州中部，朝鮮半島北部，アムール，ウスーリーにかけて分布する典型的なユリ科の春植物で，古くは万葉の昔から大伴家持によっても“もののふの八十乙女らが汲みまごふ寺井の上の堅香子の花”，と歌に詠まれているくらい私たち日本人には親しみ深い存在の植物です。コナラ，アベマキ，イヌシデ，サワシバ，ホオノキ，コブシなど，日本列島中北部の丘陵帯や平野部に発達する早春の落葉樹林林床に群生し，赤紫色で大型の花を下垂させて咲かせるカタクリの清楚な花は，一度見た人を誰ひとりとして惹きつけずにはおかない存在です。しかし，私たちにとって，このような魅力的な存在であるカタクリも花を咲かせる段階に達するまでには何と最低７－８年もかかることが明らかにされています。大きさ１－1.5ミリ前後の黄褐色の種子の先端部には，エライオソームと呼ばれる付属部がついていますが，その中には脂肪酸や高級炭化水素が豊富に含まれ，これらの物質に惹きつけられてきた蟻たちによって種子が散布されているのです。親個体から散布された種子から翌年の春，発芽した１年目の芽生えは，高さ５－６センチのあまり目立たない糸状の形をしていますが，２年目以降は１センチ前後の卵形の葉を一枚つけ，以後数年間は広卵形の葉を次第に大きくしながら地下の鱗茎に貯蔵物質を蓄えていきます。やがて７年目に到達した個体のいくつかは，地上に葉を２枚つけ，その間に10センチぐらいの１本の花茎をあげて，先端に大きく反り返って咲かせる赤紫色を１個つけます。自分の花で作った花粉では結実できない，典型的な他殖型のカタクリにとって，最も大切な送粉者はクマバチやマルハナバチなどの大型のハチ達や，ギフチョウなどの早春に活躍する昆虫達なのです。しかし，こうした見事な花の季節も長くは続きません。樹冠の木々が展葉を終える４月の下旬から５月の中旬までには，もうすっかり地上からその姿を消してしまいます。今日，平野部や丘陵帯からは，宅地造成やゴルフ場の建設などによって次第にカタクリの生活の場である雑木林がその姿をけしつつあります。私達，日本人の心の故郷ともいえるこうした身近な自然をいつまでも残しておきたいものです。

関西自然保護機構（ＫＯＮＣ：Kansai Organization for Nature Conservation）

ＫＯＮＣはなんらかの形で，専門家として自然環境保護にかかわる人たちを幅広く組織して，自然環境保全に関する各分野での研究を結集し，その研究の進歩と自然環境の保護・保全のために努力することをめざして，1978年に創立されました。

ＫＯＮＣはその活動の成果と，会員個々人の学識と経験の蓄積にもとづいて，近畿地方に於ける広い意味での自然保護の諸問題に対する有力なアドバイザリー・ボディ（助言勧告機関）として，社会の要請にこたえることを企図しています。

現代，次のような活動をしています。

1．　基礎研究の実施
2．　シンポジウム・セミナー・講演会などの開催
3．　現地見学会の開催
4．　研究助成金の交付
5．　会報・連絡紙の発行
6．　自然保護に関する基礎資料の収集と配付
7．　自然保護および自然環境保全に関する提言と助言
8．　国内外の諸団体との連絡・協力

会の活動は，個人会員・推持会員の会費により，まかなわれています。